

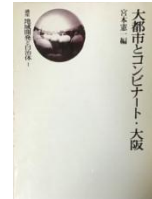
## 加茂利男先生「個人史としての現代」

大阪市大の図書館で『立命館大学人文科学研究所紀要』を手にとった。ゼミの仲間から、127号に加茂利男先生「個人史としての現代：政治・都市・地方自治研究を語る」が収録されていると聞いたからだ。じつに100ページ余りにわたり、加茂先生の個人史が綴られている。一気に読みすすんだ。思い出に残るところをすこし紹介したい。



大学紛争がある程度収まった頃だったと思いますが、大学からの帰りに駅で商学部の宮本憲一先生に会いました。「一つ頼みがあるのだが」と切り出され、「堺泉北臨海工業地帯でひどい大気汚染が起こっているみたいなので、学際的なチームを作って調査しようと思っているが、君も政治学の立場から調査に加わってもらえないか」と言われました。私も公害問題のことは気になっていましたので、参加させてもらうことにし、水口さんにも一緒に加わってもらいました。

それから数年がかりで調査をしました。堺市から高石市にかけての広大な海岸線の松林や砂浜を壊し、海を埋め立てて巨大な工業地帯を作ったこのプロジェクトの経緯・顛末を調べるために20数名の研究者が参加し、埋め立て地や近隣の住宅地を歩き回り、大阪府や堺市、高石市の幹部、住民、公害被害者団体などにインタビューし、統計や議会議事録などの資料を渉猟した大掛かりな研究でした。



その成果は『大都市とコンビナート・大阪』(1977年)として筑摩書房から出版されましたが、私にとっては初めての地域調査になりました。この共同研究は、私に現場に出かけて社会問題を調査する経験を得させ、その後も何かにつけて現場に見に行く習慣をつけさせてくれました。その時には意識していなかったのですが、戦後の日本資本主義が、重化学工業化と地域開発を旗印に経済成長をスタートさせていったありさまを、地域という場面から眺めていたことにもなります。このことを教えてくれた宮本先生は、形式的には学部も分野も違いましたが、実質的には第四の恩師でした。

私が加茂先生と出会ったのは、この堺泉北の研究会だった。1971年に信州大を卒業して、大阪市大近くの下宿して「浪人」生活をはじめた。宮本先生の大学院ゼミに参加させてもらい、堺泉北調査にも途中から加わった。何も分からないまま、大学院入試の準備をするなかで、研究会事務局の補助的な仕事もした。そんな関係で、加茂研究室によく出かけた。緊張して研究室に行くと、いつもやさしく接してもらった。まだ若いのに、どこか風格さえ感じたことを覚えている。1977年に出版された『大都市とコンビナート・大阪』で、加茂先生は第VI章「コンビナートと都市政治」を執筆している。私も年表などに関わったが、修士論文の関係などで残念ながら執筆できなかった。

(2021年11月19日)